

千年先の、島の未来へ。 宮古島市の、島中を巻き込む情報発信

ーローカルSDGs構築セミナー 第4回講演編 開催レポートー

[地域循環共生圏づくりプラットフォーム構築事業](#)では、地域の環境・経済・社会を元気にしたいと考える人たちが、一步を踏み出す「きっかけ」や「学び」を得るためのセミナー「ローカルSDGs構築セミナー」を開催しています。

第4回講演編では、宮古島市役所 企画政策部 エコアイランド推進課より友利さんをお招きし、『地域づくりの応援者を増やす、地域の魅力を伝える情報発信術』をテーマにお話しいただきました。

その内容をレポートします。

宮古島市役所 企画政策部 エコアイランド推進課について

宮古島市では、2008年に「エコアイランド宮古島宣言」を行い、持続可能な島づくりをすすめている。2021年から「せんねんプラットフォーム」の運用をスタートし、翌年2月には「せんねん祭（千年先の宮古島市に向けた、アイデア発表イベント）」を開催し、二人の市民からアイデアが発表された。今後も、市民との対話を通して、市民のアイデアを実行することのできるプラットフォームとして継続を目指している。

【参考】せんねんプラットフォーム：<https://sennen-pf.com/>

友利:今日は、宮古島市が「せんねんプラットフォーム」をつくっていく中で、どのようなことに取り組んできたのかを中心にお話しをしていきます。

情報発信については、まだまだ手探りなこともある状況でこの場に立たせてもらっていますが、そうした試行錯誤も含めて参考になるお話しをできると良いなと思っています。

経済が発展していく中で、置き去りになってしまった島の環境と市民の心

友利:まず、宮古島市の取り組みの背景をご紹介させてください。

宮古島市は山や川が無い平坦な島で、大きな河川等はありません。隆起サンゴ礁でできた島で、地下水が大変豊富なため、その地下水に依存して島民の生活が成り立っています。

本土復帰(昭和47年5月15日復帰)する前は、干ばつや大型の台風による影響が大きく、そもそも島で暮らすことが大変難しく、人口も減少傾向にありました。

ですが、本土復帰を境に道路や水道などのインフラが整備されるようになり、島での暮らしが成立しやすくなり、人口も回復していきました。

特に、地下ダムの開発の影響は大きなものでした。宮古島の農業は、干ばつによる「水なし農業」であると言われていたのですが、地下ダムの開発により、島で農業をしっかり行っている状況になりました。

こうした背景により、宮古島の人口は回復していきました。

一方で、それにより起こったのが地下水質の悪化です。

宮古島は地下水で飲料用水を賄っていますが、この地下水の硝酸態窒素濃度が8.9mg/Lまで上昇しました。これが、10mg/Lを超えると飲み水として使えなくなってしまいます。

宮古島は、地下水で生きている島です。それが飲めなくなるということは、人が生きていくこと自体がそもそも厳しくなってしまうということです。

現在は、地下水の保全条例が作られ、硝酸態窒素濃度の原因となっていた農業・畜産業への対策をしっかり行ったことで、6mg/Lで安定しています。

こうした出来事を通して、宮古島では環境に対する意識が向上していきました。

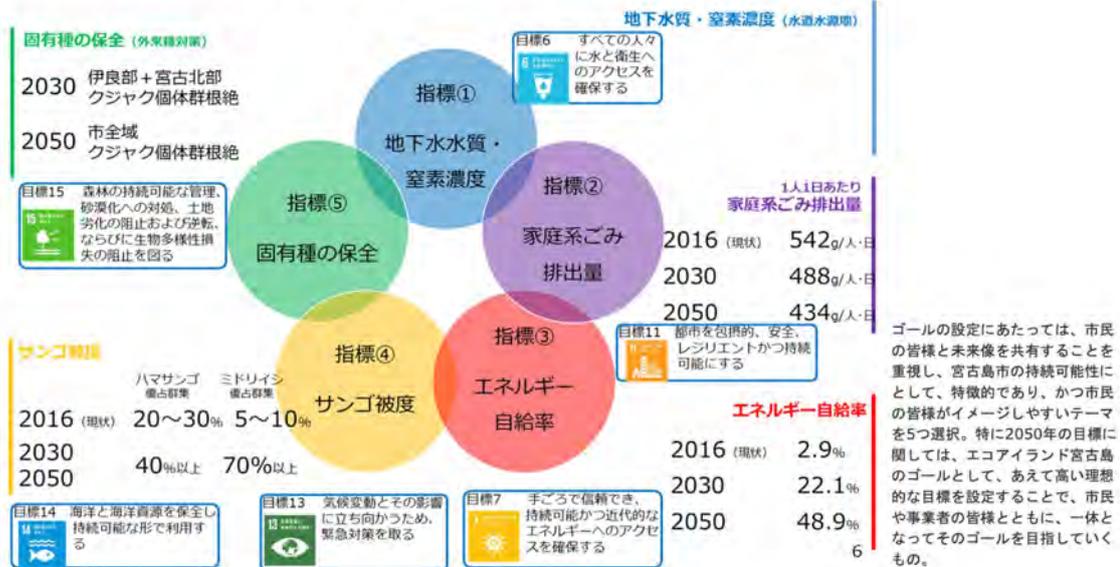
そんな中で、平成20年3月に「エコアイランド宮古島 宣言」を出しました。

「エコアイランド」とは、「いつまでも住み続けられる豊かな島」という意味です。エコアイランドの実現に向けて、環境保全・資源循環・産業振興を三本柱として推進していくことを宣言しています。

平成30年には、宣言2.0という形で『千年先の、未来へ。』という標語を設けています。

宮古島市として目指す5つのゴールも、このタイミングで掲げています。

エコアイランド宮古島として掲げていること



エコアイランド宮古島の推進にあたっては、大きく「エネルギー事業」と「啓発活動」の二つを進めてきました。

エネルギー事業としては、近年はPPA(Power purchase agreement :電力販売契約)に取り組んでおりますし、過去にはバイオエタノール事業や地熱利用・天然ガス利用の検討などに取り組んでいました。

啓発活動としては、公式サイトを設けたり、市民がボランティアをした時にお渡しする地域クーポンである「理想通貨」の企画・開発をしたりしてきました。

こうした取り組みを行っていましたが、持続可能な島づくりに向けては市民の巻き込みに課題を感じていました。

市民の皆さんは、「ゴミがなくなること＝エコアイランド」という認識を強く持つ傾向があるのですが、ゴミ以外の他の分野に対しても意識を向けてもらわないと持続可能な島にはなれません。

行政としても、行政主導でできる取り組み(エネルギー事業・啓発事業)に取り組んでいましたが、それだけではエコアイランドの実現には辿り着けないと思っていました。

こうした中、宮古島市では観光業が活発になるという社会環境の変化がありました。

宮古島市には観光のイメージがあるかもしれませんが、実は観光客が昔から多い地域というわけではありません。2015年に、伊良部大橋という無料で渡れる日本一長い橋が開通したことをきっかけに、観光客が毎年倍増し続けていました。

新型コロナ流行前の2019年頃には、観光客が年間約114万人ほど訪れるまでになっていました。

観光客の増加に伴い、リゾートホテルの開発も増えていきました。島の海岸線沿いの風景は、「年」ではなく「月」単位で変わっていきました。

開発の増加に伴い作業員の流入も多くあり、その受け入れのためのアパートも増えていきました。そんな中で起こったのが、家賃の高騰でした。資材の高騰も相まって、新しく建った新築のアパートだけではなくて、以前からあったアパートの家賃も値上げしていきました。

クルーズ船の寄港の回数も増えていました。例えば、1日に2隻のクルーズ船が島の沖に停泊をして、4,000人あまりが一気に島に入ってくるようになりました。普段は、住民5万5000人の島です。スーパーが混雑したり、日常では起こらないような渋滞が起きていました。

経済が活性化されて、観光客も増えました。ですが、市民の中では、それに「取り残された感」「普通の暮らしへの不安」「不満」の気持ちが増していたのです。

「知る」「深める」「始める」「生み出す」のサイクルで、島で自ら活動する人を増やす

友利:こうした状況の中で、環境省さんの地域循環共生圏づくりプラットフォーム構築事業にエントリーしました。

宮古島市内の様々な地域の方とワークショップを行い、島の大切にしたい価値観や、島のありたい未来をめぐって会話する中でたどり着いたのが「宮古島版マンダラ」です。

※マンダラ…地域のありたい姿とそこに至るプロセスを見える化するためのツール。バックキャストによる地域づくりを行うために、地域循環共生圏づくりにおいて作成を推奨している

マンダラづくりを通して、改めて大切にしたいと思ったのは、島のみんなで未来を考える、そのために集って話をするということです。

共に考え、共に未来を思い描いて、そしてその未来図に向かって取り組みを行い、振り返って、また考える。これを繰り返すことで、持続可能な島づくり=エコアイランド宮古島が達成できるんじゃないかと考えています。

そして、これを実現するための仕組みがプラットフォームです。

プラットフォームは、「千年先の、未来へ」と繋がるものにするために「せんねんプラットフォーム」と名付けました。

「せんねんプラットフォーム」をひと言で表すと、『市民と民間と行政が一体となり、エコアイランド宮古島の実現に向けて、取り組みを実行していくための仕組み・基盤』です。

市民からは「こまりごと」「知りたいこと」「したいこと」をプラットフォームに持ち込んでいただきます。その上でプラットフォーム事務局では、情報を集めたり、地域の現状を伝えたり、新しい取り組みを始めようとしている市民の後押しをしたりします。

エコアイランド宮古島が目指す せんねんプラットフォームの役割・機能

目指す姿

持続可能な島づくり いつまでも住み続けられる豊かな島づくり～千年先の、未来へ。～

いつまでも住み続けられる「エコアイランド宮古島」について、市民×事業者等×行政が一体となり

共に考え、持続可能な島をつくるための基盤として、プラットフォームを構築していきます



せんねんプラットフォームでは、持続可能な島づくりに向けて、「知る」「深める」「生み出す」「始める」をコンセプトに様々な取り組みを行っています。

《せんねんシネマ》は、ソーシャルシネマ(社会的なテーマを取り上げる映画)の無料上映会です。「映画を通して宮古の未来を考えられるってじょーとーだよな」というキャッチコピーで開催しています。「じょーとー」は沖縄でよく使われる表現で、「良い」という意味です。

ソーシャルシネマで取り扱われている課題を通して、社会課題を知ったり、「実は宮古島でも同じことが起こっているんじゃないか」という気づきを得るための場です。

《せんねんトーク》は、「宮古の人ってんむっし人がいるよね、いい意味で」というキャッチコピーで開催しています。「んむっし」は、宮古の言葉で、「面白い」という意味です。

宮古の未来につながる行動をすでに行っている方をトークゲストとして呼び出して、YouTubeのライブで公開座談会を行っています。

例えば「活動をしようと思ったきっかけ」「その活動を続けている想い」を聞くことで、視聴者に「私にもできるんじゃないかな」「私もやりたい」と思って欲しいです。

《せんねんラジオ》は、『FMみやこ』というローカルラジオで配信している番組です。

宮古島には、ラジオを聴く方が多くいます。例えば、農作業しながらカーステレオでラジオをずっと流している方もいますし、休憩時間に聞く方もいます。

「持続可能な」とか「エコアイランド宮古島」と聞くと、ハードルが高い印象を持たれがちなので、普段聴いているラジオの中の中で、気軽に島の持続可能性について考えるきっかけになると良いなと思っています。

プラットフォームの取り組み

持続可能性の課題を
「自分ごとに」



活動者の課題への姿
勢を知る広げる



持続可能性や宮古の
課題を知る入口



また、《せんねんミーティング》《せんねん祭》というイベントを行っています。

《せんねん祭》は、市民が持続可能な千年先の宮古に向けた島のアイデアを発表する会として実施をしています。YouTubeでのライブ配信と『FMみやこ』さんでの生放送を行うことで、広く大勢の方に観て、聴いていただけるイベントです。

《せんねんミーティング》は、この《せんねん祭》の発表に向けて新しいアイデアをブラッシュアップしていく過程をライブ配信しているものです。

今年の《せんねん祭》には、レオクラブ宮古島さんと、根間玄隆さんが登壇予定する予定です。それぞれ10分間ずつ発表の時間を設けており、自身のアイデア・取り組む上での課題について発表していただきます。

レオクラブ宮古島さんは、島の学童に通っている子どもたちです。普段からゴミ拾いを定期的に行う中で、自分たちの島のゴミの多さ、特にプラスチックのゴミの多さに課題意識を持っています。

《せんねんシネマ》で『プラスチックの海』(原題『A Plastic Ocean』2016年)という映画を流した時に、レオクラブ宮古島さんも来てくださっていました。世界的にもプラスチック問題があることを知り、自分たちにもできるアクションを考えました。それが、「市内に無料でマイボトルに給水できる「給水ステーション」を増やしたい！」ということです。

根間玄隆さんは、島にある通信の高校の学校長をされている方です。島の子どもたちの中学卒業後の選択肢が限られていることや、地域の大人との関わりが限られていることで地域の職業・魅力を知らない子どもが多いことに課題感を持っています。こうした課題意識から、島の学生が多様な大人と関わるができる仕組みづくりのアイデアを発表する予定です。

《せんねん祭》には、配信を観ていただいた方から、その活動を応援する「賛同の声」を集める仕組みがあります。「いいね！を贈る」という気軽なものもあれば、自分が持っているスキルや経験を使って実際に活動に参画する「サポーターになる」というものもあります。また、「ファンダーになる」ことで資金面での支援もできます。

《せんねん祭》での発表者は、こうして実際に集まった新しい仲間と1年間プロジェクトの実行に向けて動いていきます。せんねんプラットフォームの事務局も伴走します。

※2023年の《せんねん祭》は、2023年2月19日に開催されました。当日の動画は、こちらから視聴可能です。<https://sennen-pf.com/festival>

プラットフォームの取り組み

持続可能な未来を
実現する取り組みを創出

「せんねんミーティング」と称して、せんねん祭の出演者がその日に向けて、アイデアを練り上げていく工程と、その打ち合わせの様子をライブ配信しています。

— せんねん祭 —
“誰ひとり取り残されない宮古”のための
島のアイデア発表会

出場者

レオクラブ宮古島さん
根間玄隆さん

賛同の声を届ける

- ①いいね！を贈る**
アイデアを応援する一人になる。
- ②ユーザーになる**
新しい取り組みの体験者として支える協力者になる。
- ③サポーターになる**
チームメンバー・ボランティア・プロボノ等、様々な形で実行を支える協力者になる。
- ④ファンダーになる**
立ち上げや運営に係る資金を提供する協力者になる。

スマートフォンのカメラでQRコードを読み取り、または「せんねん祭 プラットフォーム」で検索。

スマホのカメラでQRコードを読み取り、①〜④から1つ選んで、ご自身に合った賛同の声を届けください。

せんねんプラットフォームの取り組みを図に表すと、このような形になります。

せんねんプラットフォームの取り組み



まずは気軽に「知る」ことから始められる《せんねんシネマ》や《せんねんラジオ》からスタートして、《せんねんトーク》で「私もできるかもしれない」という気持ちになる。その後、《せんねんミーティング》の中で事務局と一緒に自分のアイデアをブラッシュアップして、《せんねん祭》で新しい仲間とプロジェクトに取り組む。

こんなサイクルを回していきたいと思って取り組みをつくっています。

「取り組みを知らない層」から「コアメンバー」まで。ターゲットによって意図的に情報発信の内容・媒体を変える

ここから、せんねんプラットフォームの情報発信方法についてご説明します。

周知にあたっては、様々な媒体を活用しています。新聞やラジオといったローカルな媒体を中心に、市HPやSNSなどの媒体も活用しています。

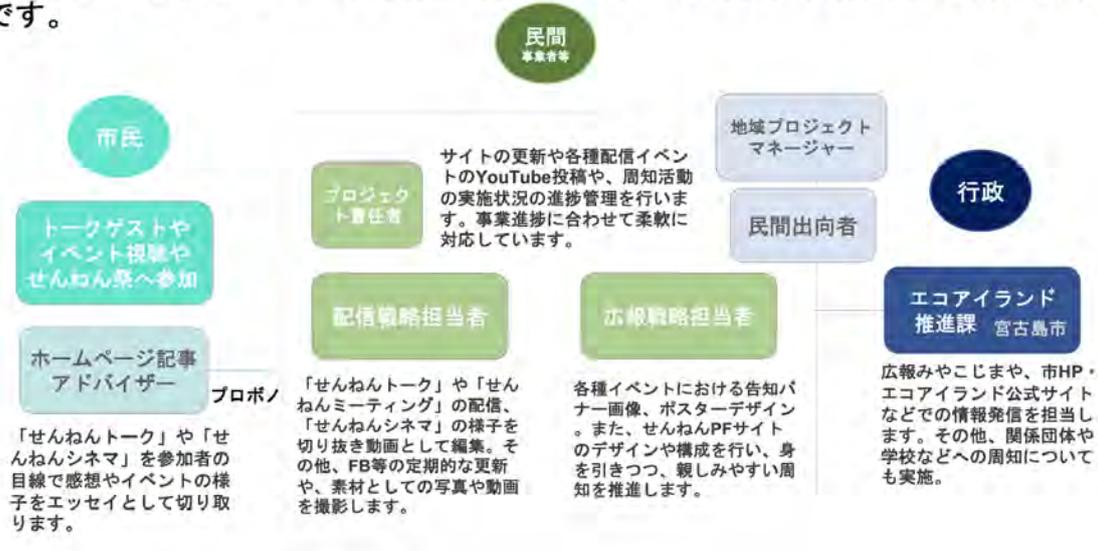
宮古には『宮古新報』と『宮古毎日新聞』という地元紙があり、せんねんプラットフォームの取り組みにはよく取材に来ていただいています。

また、『広報みやこじま』という宮古島の広報誌や、『島の色』『宮古ストーリー』などのフリーペーパーなどにも掲載をしています。

周知も含め、事業の実施体制はこのようになっています。

実施体制について

せんねんプラットフォームで周知含めを事業を行う際の実施体制は以下のとおりです。



体制の中には、「配信戦略担当者」と「広報戦略担当者」を設けています。

「配信戦略担当者」は、《せんねんトーク》や《せんねんミーティング》の配信を行ったり、様々なイベントの取り組みを切り抜き動画としてつくったりしています。また、FacebookなどSNSの定期的な更新も担っています。

「広報戦略担当者」は、いわゆるデザイナーです。せんねんプラットフォームのサイトや、YouTubeのバナー、ポスターなどのデザインを担当しています。親しみやすさや分かりやすさを打ち出し、この取り組みに多くの方に関わっていただけるようなデザインをいただいています。

「地域プロジェクトマネージャー」という、プラットフォームの取り組みと一緒に取り組んでくださる民間出向者もいます。こうした民間の視点を持つ方の意見も取り入れながら周知について考えています。

また、《せんねんトーク》や《せんねんシネマ》については、プロボノとして、ホームページの記事のアドバイザーをしてくださっている方もいます。

周知の対象者としては、こちらの図のような形で捉えています。

この半円形の中の一番中心を『コアメンバー』とした時に、《せんねんトーク》に出ていただいたトークゲストの方は『出場者としての参加層』、《せんねんトーク》を観てくれた方は『イベントへの参加層』、新聞やホームページなどを通して『取り組みを知っている層』、まだ『知らない・興味の無い層』に分けることができます。

まずは『取り組みを知っている層』からスタートして、徐々に関わりを深くしていってもらえるように、媒体や周知方法などを工夫しています。

周知の対象者について

せんねんプラットフォームにおける様々な取り組みにおいては、そこに関わる方々に関わりの度合いによって、以下の図のように捉えている。
それぞれ関わりの度合いによって、濃淡があると考えており、また、知らない層がせんねんプラットフォームへの入口として「せんねんシネマ」の視聴から、参加層への変化や、せんねんトークへのゲスト登壇者はイベントのゲストとしてだけではなく、せんねんプラットフォームの事務局メンバーとしての新たな関係性へと発展するきっかけとなる可能性が期待される。



冒頭にお伝えしたように、私たちも情報発信については手探りなこともある状況です。

例えば、「周知の効果は出ているのか」「新しい取り組みを増やすだけでなく、今ある取り組みの中で整理すべきものはないか」「届けるべきターゲットに取りこぼしはないか」などの困りごとを抱えています。

こうした困りごとを解決し、プラットフォームをさらに進化させるにあたっては、まだまだ仲間が必要だと考えています。

そういう意味でも、一緒に考えてくれる仲間をこれからもっともっと増やしていきたいです。

=====

「ローカルSDGs構築セミナー」をはじめとする、地域循環共生圏に関する情報を、メールマガジンで配信しています。ご関心のある方は、ぜひこちらからご登録ください。

【連絡先】メールマガジン事務局(いであ株式会社内)

mail@chiikijunkan.jp